

# 小笠原の文化と星空

## —VERA 小笠原観測局から—

官 谷 幸 利

〈国立天文台 VERA 小笠原観測所 〒100-2101 東京都小笠原村父島字旭山〉

e-mail: yukitoshi.kan-ya@nao.ac.jp

小笠原諸島の父島に 2001 年 11 月、銀河系の立体地図を描き出すことを目的とした、国立天文台の VLBI アstrometry プロジェクト「VERA 計画」(VLBI Exploration in Radio Astrometry) の観測局として、国立天文台 VERA 小笠原観測所が開局されました(図 1)。美しい自然豊かな小笠原の歴史と文化、そしてその中の VERA 小笠原局の位置について、思うところを綴っていこうと思います。

### 1. 日本にあるもう一つの南洋

南の空の果て  
波の花咲く島に  
浮世を遠く見て  
恋を語る二人よ  
心は丸木舟に

小笠原民謡「丸木舟」<sup>1)</sup>は、南洋の時の流れを感じさせてくれる美しい歌です。小笠原には、内地(日本本土のことをこう呼びます)とも沖縄とも違う、小笠原のたどった数奇な運命が織り成す独特の文化の育んだ歌が、幾多の苦難にもめげず伝えられています。

この小笠原諸島の父島に 2001 年 11 月、銀河系の立体地図を描き出すことを目的とした、国立天文台の VLBI アstrometry プロジェクト「VERA 計画」(VLBI Exploration in Radio Astrometry) の観測局として、国立天文台 VERA 小笠原観測所が開局されました(図 1)。小笠原観測局の 20 m アンテナは、大気の揺らぎを除去するために、国立天文台の川口則幸氏らと三菱電機の開発による 2 ビームシステム<sup>2)</sup>を世界で初めて備えています。

この開局の時に初めて小笠原を訪れて以来、何度か小笠原観測所を訪れるたびに小笠原の美しい自然に魅せられてきた筆者は、2004 年の 4 月から小笠原観測所に常駐員として、地元の運用支援員の奥山嘉英さんとともに局運用と VERA データの解析に携わっています(図 2)。本稿では、学問的というよりは、肩の凝らない一般的な興味を誘うものを、とのことですので、南の島ではあっても沖縄に比べあまりなじみのない方が多いと思われる、日本のもう一つの南洋・小笠原の歴史と文

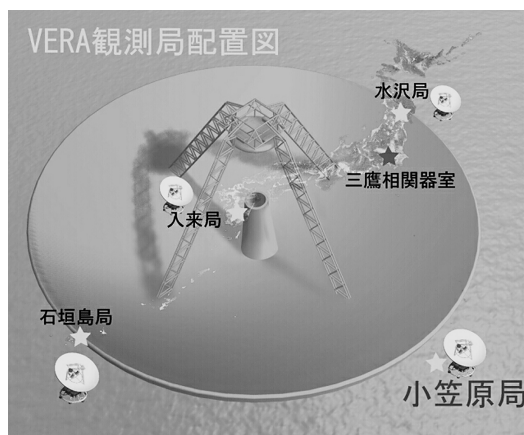


図 1 VERA4 局の配置図と小笠原局の位置。



図2 観測局にて、左から奥山・官谷・宮地。

化、そしてその中のVERA小笠原局の位置について、思うところを綴っていこうと思います。

## 2. 歴史1: 文化の形成

小笠原群島は東京都に属する、東京の南約1,000キロの太平洋上に細長く南北に点在する島々です。これらの島々の急峻な地形は、人の定住を長い間拒んできました。現在でも父島・母島にのみ人が生活しており、人口は約2,300人（1998年）です。他の島は無人島になっています。

アクセスとしては今のところ、東京から船で25時間半かかる週1回の定期便「おがさわら丸」しかありません。この南米並みの遠さが、島の自然を比較的良好に保全するのに功を奏しているようです。急で切り立った崖がほとんどを占める地勢のため、飛行場を作るのは非常に難しいようで、緊急時に硫黄島から飛行艇やヘリがくる以外は、基本的に海運で生活が保たれています。

伝承では、戦国末期の文禄二年（1593）、小笠原貞頼という信濃の武将が、八丈島の南方を探検し、日本人として初めて小笠原に到達したとされています<sup>3)</sup>。ただ、小笠原貞頼の実在性を巡っては諸説あり、結局いつごろから日本人に知られるようになったのか、詳しいところはよくわかりません。少なくとも江戸期にはその存在は認識されていた模様で、無人島（ぶにんしま）と呼

ばれていました。その名のとおり、人が長期にわたり定住することはなかったようです。貞頼の名をとって「小笠原」と呼ばれるようになったのは、18世紀末頃の様子です<sup>4)</sup>。

小笠原に転機が訪れたのは19世紀に入ってからでした。アメリカなどによる太平洋の捕鯨活動が活発化し、太平洋の島々に捕鯨船の補給基地の需要が高まった1830年、5人の欧米人と20人のハワイ人が父島に定住・開拓を始め、このときから小笠原の歴史は始まります。最初にもたらされた文化はハワイと欧米系の文化だったわけです。その後、日本に開国を迫るために航海してきたアメリカのペリーやロシアのプチャーチンも、父島に立ち寄っています。当時立ち寄った捕鯨船乗組員のスケッチには、アオウミガメが大量に浜辺に上がっている様子が描かれ、ウミガメの楽園といった雰囲気が伺えます<sup>5)</sup>。

ペリーの報告などの情報を受け、主に南方の貿易中継点としての必要を認識した幕府は1861年、中浜“ジョン”万次郎らを通訳に、渡米から帰った咸臨丸を小笠原に派遣し、日本人としては初の入植を行いました。この第1回の入植は、幕末の風雲のなか、1863年には断念されることになってのですが、このときの欧米・ハワイ系住民の方々の堂々とした態度は、幕府の入植者達の尊敬の的であったとのことでした。

明治に入って1876年、明治政府が定期便を開設し、小笠原への日本人の本格的な入植が始まります。小笠原が日本領として国際的に認められるまでもいろいろあったようですし、開拓は苦難の連続でしたが、大正の頃からは、南洋の日本領の島々への玄関口として、また内地への冬出野菜の出荷や捕鯨で、小笠原は栄えることになりました。北原白秋などの文人が訪れ、愛した島でもありました<sup>6)</sup>。

そんな中、最初の入植者たちのもたらしたハワイ系の文化、日本人入植者の文化、そして、パラオやグアムなどの南洋諸島と内地を行き来する

人々が通り過ぎるときにもたらす文化が融合して、「丸木舟」のような、美しい民謡が生み出されました。歌詞は日本語ですが、メロディーはパラオに、形式はヤップにルーツがあるという説が有力なようです<sup>6)</sup>。近年売り出されたCD<sup>7)</sup>などでは、ハワイアの伴奏に乗せて歌われていて、これがよく合います。

語彙としても南洋起源・英語起源の語彙が多く小笠原に入り、独特の方言を形作っていったようです。奥山さんの小さい頃にも、それらの語彙は使われていたそうで、最近出た小笠原の言葉の辞典<sup>7)</sup>に感心していました。

小笠原独特の文化の基盤はこの頃に形づくられたのですが、その後の歴史のめまぐるしい展開に、小笠原は翻弄されることとなります。

### 3. 歴史 2: 文化の断絶と再形成

太平洋戦争が激化した1944年、島民は内地に強制的に疎開することとなりました。現在でもこの頃のトーチカや砲台、沈船は島の所々に見え、戦争の爪痕を残しています<sup>8)</sup>。現在のアメリカ合衆国ジョージ・W・ブッシュ大統領の父・ブッシュ元大統領は、父島の戦闘で乗っていたアベンジャー雷撃機を撃墜され、海に脱出後潜水艦に拾われて九死に一生を得るという経験をしています<sup>9)</sup>。

終戦とともに小笠原はアメリカの統治下に入ることとなりました。戦中に強制疎開させられた島民たちのうち、帰島を許されたのは欧米・ハワイ系の島民のみで、日本人は許されませんでした。島では英語の教育が行われ、島の文化はアメリカ風に一新されることとなります。

終戦から23年後の1968年に小笠原は日本に返還され、日本人の元島民の帰島が許されました。日本人島民にとっては懐かしい故郷への帰還であったでしょうが、欧米・ハワイ系の新世代の方たちにとっては、昨日まで英語で語り、アメリカ風の生活になじんできた矢先の日本返還というこ

とで、かなりの戸惑いがあったようです。当時を知る欧米・ハワイ系の方とお話をすると、英語混じりに当時の苦勞を語ってくださいます。

現在は、戦争で一度断ち切られた島の文化、返還で断ち切られたアメリカの文化、返還後に新しく島に住むようになった人の新しい日本の文化が、美しい自然の中で混在しています。これらの、それぞれに歴史を背負った諸文化が、戦前に育まれたような新しい文化として融合するまでには、まだこれから長い時間が必要なのでしょう。

内地から来た欧米系の旅行者の方が、この島に来て驚いたことのひとつが、「誰も自分を見て振り返らないこと」だそうです。元から欧米系の住民の方がその辺を歩いているのが当たり前の島ですので、誰も「あ、ガイジンだ」と気にも留めない、ということでしょう。もっとも、この島の方は欧米系の方も皆、日に焼けていますので、「何だ、白いと思ったら旅行者の人か」とは言われるそうですが、こういう雰囲気があるだけでも、何か内地とは違う新しいものが生まれるのではないかと、楽しみになります。

最近では、伝統の祭りや太鼓・踊り以外にも、カカと呼ばれる南洋のパーカッションや、ハワイのフラ、スチールドラムのオーケストラといったチームが、祭りに定着してきたようで、まだこの島の文化は伸びしろが大きいようです。

### 4. VERA 小笠原観測局

#### 「オレンジペペ」

現在の父島の主な産業は観光と漁業、特に観光の比重が高く、近海に棲む鯨を見物するホエールウォッチングや、イルカと泳ぐドルフィンスイム、ダイビングやサーフィンといった海の観光が盛況です。そして、島の夜の観光のハイライトは、「グリーンペペ」見物です。

「グリーンペペ」は和名をヤコウタケという、淡い緑色の光を出している珍しいキノコで、開いた傘が1 cm 程度の大きさの、小さな白いキノコで

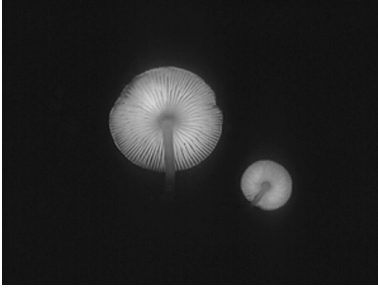


図3 ヤコウタケ「グリーンペペ」(小笠原観光協会提供).

す(図3)。初夏や晩秋の、父島では湿気の多い時期に、森の中などで見られます。木々の間からほの見える星明りだけが頼りの森の中で、いくつものキノコが地面で光っている光景に出会うと、星々に包まれているかのような錯覚を覚えます。

そして最近ではもう一つの大きなキノコ「オレンジペペ」(国立天文台・宮地竹史氏命名)＝VERA20m アンテナが、夜の観光ツアーのもう一つのハイライトとして認知されてきました(図4)。

現在VERA観測所の四つのアンテナは、国立天文台の柴田克典氏らの努力により、国立天文台水沢観測所からカメラ越しにネットワーク操作を行うシステムを完成させています<sup>10)</sup>。このために、夜はナトリウムランプでライトアップされているのですが、大きなオブジェのようなものがない島のこと、巨大なキノコのようにそびえ立つ20mアンテナは、観光に訪れた方の興味をひくようです。正月や夏といった観光シーズンには、多くの方の興味をひいた模様です。2006年はどれだけの方が訪れてくださるか、期待しています。

奥山さんとともに観光客への対応をすることもありますが、観光客、島の方とも、訪れてくださった方の反応は上々です。が、さまざまな文化の混在しながらも狭い島社会のこと、来ていない方々の理解を得るための努力も、島事情に詳しい奥山さんの助言を参考に、これからも進めなければと思います。

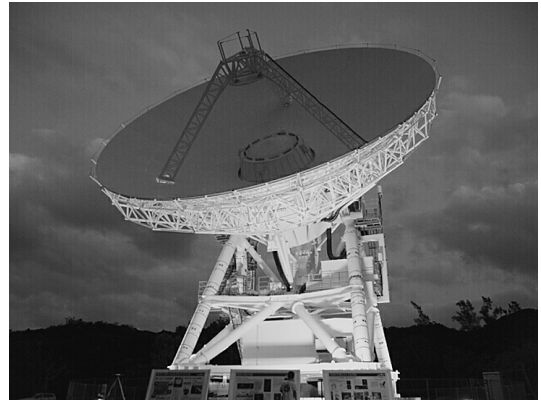


図4 ライトアップしたVERA小笠原観測局「オレンジペペ」。

## 5. 島の新しい文化に星を

戦前に内地から南洋へ、また南洋から内地に行く際に、玄関口である小笠原を訪ねた人々は、口をそろえて、「小笠原の星空は美しい」と賛嘆していたと聞きます。その星空は今でも変わりません。

しかしながらこの星空は、現在の小笠原ではあまり重視されているとはいええないようです。島の子どもたち相手の観望会を行っていて気になるのが、こんなに素晴らしい星空に囲まれて暮らしているのに、ほとんどの子どもたちは星座や惑星について、ほとんど知らないことです。話をすると、関心がないわけではないのですが、どのような見方をすればいいのかがわからないようです。

これにはさまざまな理由が考えられると思います。昼間、海や山の自然で子どもたちはいっぱい遊んで、そちらが遊びのメインになるわけですので、夜にまわす暇はない、のかもしれませんが。一方で、何度かの文化の断絶を経験してきたこの島で、世代間で伝わる星空に関する伝説や知識の伝承が断ち切られたのも、理由の一つなのではないかと思っています。これだけの美しい星空への知識が子どもたちの中で定着すれば、その知識は次の世代には、今形成されつつある新しい島の文



化の一部になってくれるのではないかと期待しています。

VERA 小笠原観測局の開局を契機に、島の星好きの方たちが「小笠原天文倶楽部」を立ち上げました。国立天文台とも協力して、昨年度は 14 回の講演・観望会を行っています。今年はさらに、文部科学省の地域子ども教室推進事業である「遊びの達人教室」に国立天文台が協力し、子ども専用の観望会を月に一度程度開いていくことになっています。

観望会といえば、昨年ほとんどハプニングもありました。伝統的七夕に合わせた観望会を、浜辺から近い公園で行っている最中に、ふと足元を見ると、大きさ数 cm 位の丸い塊がたくさん通り過ぎていきます。これが実は、浜で孵化したばかりのアオウミガメの赤ん坊。急遽、ウミガメの保護を行っている海洋センターに連絡し、観望会に来てくださった方にも協力してもらって、100 匹以上の赤ちゃんを保護し、そのままウミガメの放流会へと移行しました。カメの赤ん坊たちは、街明かりに寄せられて、海とは反対側に上がってきてしまった模様です。このような事件(?)は頻繁に起きていて、小笠原の自然環境の保全には課題も多く残されています<sup>11)</sup>。ウミガメが安心して産卵ができる島にしたいものです。

1915 年に東京天文台観測隊が、8 月 11 日の金環日食観測のために母島を訪れ、記念碑を建てたと記録にあります<sup>9)</sup>。かつて小笠原で観測を行っ

た先人たちも、夜はきつと、南の空に高く登った銀河中心部の圧倒的な姿を見ながら、島の方たちと星について語り合ったことと思います。VERA による銀河系の研究の傍ら、島の文化にも貢献できればと思います。

最後に、国立天文台 VERA 観測所所長の小林秀行氏、国立天文台 VERA 観測所と水沢観測所の関係者の皆様、そして小笠原天文倶楽部の皆様に感謝いたします。

### 参考文献

- 1) リングリンクス, 1999, 小笠原古謡集 (音楽 CD・インディペンデントレーベル)
- 2) Kawaguchi N., Sasao T., Manabe S., 2000, SPIE 4015, 544
- 3) 小笠原諸島返還 30 周年記念事業実行委員会編, 1998, 小笠原諸島返還 30 周年記念誌
- 4) 田中弘之, 1997, 幕末の小笠原 (中公新書)
- 5) 倉田洋二編, 1993, 写真帳「小笠原」増補版 (アボック社)
- 6) 北国ゆう, 2004, 「小笠原学ことはじめ」, ダニエル・ロング編 (南方新社), p. 129
- 7) ダニエル・ロング, 橋本直幸編, 2005, 「小笠原ことば・しゃべる辞典」(南方新社)
- 8) 待島 亮, 2003, 小笠原戦跡一覧 (創英社/三省堂書店)
- 9) 清水善和, 1998, 小笠原自然年代記 (岩波書店)
- 10) 国立天文台 VERA 観測所, 2004, VERA NEWS No. 24
- 11) 東京農大小笠原 100 の素顔編集委員会編, 2004, 小笠原 100 の素顔 II ドングラ (東京農大出版会)